



1995 年 (平成 7 年)
10 月号 (No.605)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

ヒマラヤに挑む	1
自然保護随想	2
故秩父宮勢津子妃殿下をお偲びして	3
訃報・秩父宮妃殿下ご逝去	3
報告	
日本山岳会創立90周年・中部プロ ック記念式典とフォーラム	4
記念山行・仙水峠、仙丈岳登山	5
記念山行・編笠山登山	6
エベレスト・ウィメンズ・サミ ット	6
支部だより	7
秋田支部 山形支部	
東西南北	
新潟県山岳協会隊カムチャッカ・ トルバチュク峰に登る	8
俳句・北岳へ	10
グライドと草棒	10
ミッテルレギ稜にて	10
短歌・ふたりの頂	12
登り残していた山、悪沢岳	12
短歌・土肥正毅会員一周忌に	13
海外の山	9
山の切手	11
山と医療	12
図書紹介・書籍受入報告	14
新入会員・住所変更	16
INFORMATION	17
創立90周年記念事業募金応募状況	17
会員異動・ルーム日誌	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10~20時
水・金曜日 13~20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13~20時

ヒマラヤに挑む —私の登山観—

藤平正夫

マカルー隊についての山田さんの一文は、事前に私に事実の確認を求められ、了承したものである。もちろん記述されている私とのやりとりは事実そのもので、それ以外のことはしゃべった記憶はほとんどない。

二人の登山観が相当異なっていることは、以前から承知しているので、煩わしさをさせたのが私の真意であった。しかし、このままでは誤解を招きそうなので、私の考え方を簡単に記しておきたい。

考え方の善悪などは決定できるものではなく、ことにこうした問題は各人

の感性によるところが大きいものと思っている。

お茶の水時代のこと、私は東京在勤でよく本部へ出入りしていた頃である。はっきりしたことは覚えていないが、当会のある遠征隊の壮行会で激励の辞を求められた。生意気盛りの私は

「さきほどの激励の辞には、必ず『立派な山登りをしている』が入っている。京都でチョゴリザの壮行会では『どんなことがあっても頂上をうちとれ』の一本槍だった。東京の方は優しい先輩をお持ちで羨ましくなってきた。よくもまあ、若僧が毒づいたもので

ある。登頂できなくても立派な山登りといえるのは、戦前のパウアー隊のロンチ東北稜しかないといわれていた私である。登頂を逸しては、どう言おうと失敗である。もちろん内容によって評価が異なるのは当然であるが、失敗は失敗である。

私らがヒマラヤに挑んでから約四十年が流れ、システム、装備、技術、情報格段の進歩を遂げたが、ヒマラヤそのものの厳しさは変わっていない。会長在任中、ある登山隊の結団式でスピーチを求められた。こんな少年っぽい隊員で登れるのだろうかと思念が先だっていた。しかも一人ひとりの挨拶が決まったように、無事帰ってうまい酒が飲みたい、と言っていた。

私はこんなとき、うまく調子を合せようかなことは言えない性質である。「諸君の狙っている山は残された未登

峰のなかで最悪のものである。全身全霊、すべての能力をぶつけてこい。うまい酒が楽しみだなんて生易しいものではない」

この隊は、その後一年間厳しいトレーニングを積み、見事成功した。帰国後、祝賀会で再会すると彼らの容貌が一変していた。精悍で目がきらめいていた。逞しい戦士に生まれ変わっていったのである。体力、技術だけでなく、心の成長と変革を果たしてきたのである。マカルーのルートの困難は旧時代の私にも理解でき、本当のところ不安が一杯であった。副会長、会長の六年間、慌ただしく東京と富山を往復するだけで、若い会員諸君とゆっくり酒を酌むこともなかった。全く私の怠慢であるところが日程も押し迫った頃、原宿の飲み屋で夜遅くまで話し合う機会に恵まれた。職業と登山の谷間で悩んでい

次代に残そう美しい山と溪

る隊員も何人かおり、仲間が率直にそのことを論議した。私は嬉しかった。当然のことだが家族や自分の職業に対する責任感と激しい山への情熱がぶつかり、渦巻いているのである。彼らはこうした中で人間としての修練を積み重ねているのだ。帰路、重廣君と歩きながらの雑談中、いざという場合の切り札として東稜からプラトリーのトラバース・ルートを考えていることがうかがえて安心したのである。

結果はその通りとなったが、ともかく登頂は成功した。

これが山田さんのいう十分ではないが六分七分の勝利かもしれない。リスクの限界まで切り込んだ厳しく、かつ凄まじいクライムであったと思う。

重廣君が登攀終了後、ベースキャンプから送ってきた通信が会報に載ったが、かの豪気の重廣君もここまで追い込まれていたのである。この通信は後世に残る名文だと思う。

故西堀栄三郎さんは、「人間とは直線的に成長するものではない、階段を上がるように困難を乗り越えることによって成長するものだ」とはかねがねの持論であった。

武田信玄の勝敗論は、そのままでは誤解を招きかねない。言い訳の材料に使われそうだからである。

マカール隊の場合に六分、七分なりと使うのなら納得できるが、しょせんは山登りと戦争とは別のものである。

ヒマラヤ登山においては東洋流の自然と人間の合一ということは通用しない。ヒマラヤのクライムは、大自然との全能力をあげる厳しい戦いである。

この素晴らしい自然との交わりは、むしろ戦いの後に訪れる。重廣君の通信の初めの部分に、ベースキャンプに乱れ咲く花を語っているのがそれである。

旧い話だが、約四十年前、平井一正君と二人、チョゴリザの初登頂を果たした翌朝、純白のチョゴリザの頂上稜線をみにくくかき乱している二人のシユプールを見て、心無い仕業であったと淡い後悔を禁じ得なかった。

追伸

山田さん、誤解しないでほしい。感性和所論の立て方の違いで、実際にヒマラヤに挑めば同じことをやっただろうと思っっています。

自然保護随想

近ごろ思うこと

澤井政信

「常気象」というものを認めたくないようであるが。

もともと、地球の熱バランスにとって太陽からの輻射熱が大きな因子となっていることについては、議論の余地がないであろう。最近、我々人類のエネルギー消費は急激に上昇しており、ある面積に限った場合、太陽のエネルギー以上の熱を放出していることもある。

そうすると、これまでの地球の熱バランスに影響がないとはいえない。こういうことが気候の異常な変動になって現れていると考えられないであらうか。

私たちができる範囲でエネルギー消費を節約することがこれからの生活スタイルとして重要であると考え、登山や山での生活を楽しむのに、人それぞれの考え方があろうと思うが、もはや目的のためにはどんなことをしてもよい、という時代ではない。二酸化炭素の放出もみんなで削減しなければいけないという時代である。林道を登れるだけ車でつめて車を置き、そこからちょいとピークを踏んで「これでいくつかせいだ」というような登山だけは、もうそろそろやめようではありませんか。

今年（一九九五年）の夏はこのほかに暑かったが、新聞の報道によればこの何年間かのわが国の夏の気温は、平年並みというものが少なく、異常に暑い、あるいは異常に寒いかの両極端であるらしい。昨年や一昨年を思い浮かべるとうなずけるようだ。

この報道を見て、ふと思ったのである。

一般に気候のようないろいろの因子が働く現象は、たとえば気温についてみると統計的にみて平均的な気温の年が一年多く、極端に高いとか、低いとかの年の回数は少ないものである。だから高温や低温が「異常」となる。この両極端の気温が多いということは、何だか自然の調節作用が限界にきているのではないかと心配になる。気象学者はなかなか「異常気象」というものを認めたくないようであるが。

故秩父宮勢津子妃殿下を お偲びして

渡辺兵力

八月に入り妃殿下がお悪いと伺い、ご案じ申し上げていたところ、二十四日にテレビがご薨去を報じた。会ではお通夜に中村副会長、ご葬儀には村木会長が参列した。

本会では八十周年の記念集會に妃殿下をお迎えして、お祝いのお言葉を賜った。また、マナスル遠征以来の會の主な海外登山や行事などについて何回か宮家に参上して妃殿下にお話しをしてきた。会にとって四十年來のお付き合いのある方である。

故秩父宮雅仁親王(注)の一九二六年のアルプス行(積有恒リッター、八・一二・九・九、マッターホルンをはじめ十数峰の登頂)は、日本の近代登山史上の画期的な登山で、我々の世代は大きな刺激を受けた。妃殿下はご成婚(一九二八年)後、一九三九年に英国王室への公式のご訪問旅行中、お二人でスイス小旅行を遊ばされて、「アルプスの美しさは判ったが、宮様が何故かくも強く「山」に魅せられて

おられるのか理由が理解できなかった。しかしご薨去の後に英国旅行中ツエルマットを訪れ、マッターホルンを眺望したとき、初めて故宮様の「山」へのお心がはっきりと共感できた」

と私に語られたことがある。妃殿下は結核予防協會のお仕事を長くなさっておられ、その関係で一九八一年にネパールに行かれ、ボカラからヒマラヤの山々を展望されて、我々がヒマラヤに熱中する気持ちもお判りになったようである。

本会にとって長いご縁のあるお二人の山の宮様を失うことになってしまった。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

注Ⅱ秩父宮殿下(一九〇二―一九五三年)は、英国山岳会(一九二八年)と日本山岳会(一九五〇年)の名誉会員。

訃報

秩父宮妃殿下ご薨去

秩父宮勢津子妃殿下は八月二十五日午前十一時二十八分、心臓病のため宮内庁病院で亡くなられた。八十五歳であられた。

妃殿下と本会との関わりは、秩父宮雅仁親王殿下に始まる。同殿下は山の宮様と愛称され、一九二〇年代以来、榎、松方氏ら多数の先輩やガイドと

もに、ヨーロッパアルプスや日本の山々で登山やスキーを楽しまれた。

勢津子妃殿下も大変山や高山植物、自然を好まれ、昭和三十一年マナスル登頂成功の際には、お心のこもったお祝いの和歌六首を詠まれ、色紙にしたためて本会にご寄贈いただいた。この色紙は資料番号#五一六として、改装なったルームに現在展示中である。

妃殿下には資料委員会の希望により秩父宮殿下の登山姿のお写真(＃一八六、一八七)や、装備(＃七〇―七〇四)を一九八〇年あるいは一九九〇年にご寄贈いただいた。これらのうち

シエンクのピッケル(＃二六七)は同じくルームに展示され、他の備品は、それぞれ上高地の山研資料室、大町山岳博物館、松本アルプス山岳館などに寄託し展示されている。また秩父宮ラ

グビー場に隣接する秩父宮記念スポーツ博物館には、マナスル隊の装備十八点が寄託され展示中である。これらはいずれも次代のアルピニストへの励ましとなっている。

一方「山」に関する顕著な科学的業績に対し「秩父宮記念学術賞」が、学術振興会から贈られることになり、昭和三十八年以来今年で三十一回を迎えた。本会では科学研究委員会が窓口となつて、昭和五十四年以来毎年候補者の推薦を行ってきた。

妃殿下は、この授賞式に毎年ご臨席になり、お言葉を賜るのが例であった。その際、受賞者や会員と親しくお言葉を交わしていただいたので、名誉会員や有志会員はこの日を楽しみにしていたものである。とくに本会の創立八十周年の記念式典に妃殿下のご臨席を賜ったのが印象的である。その時の妃殿下のお言葉は、来賓の通り一遍の挨拶ではなく、山や宮様を想われる真情あふれる内容であつて、出席者の心に深い感銘を与えた。

本年三月には、現会長はじめ有志が宮邸に表敬訪問に伺い、私どものピレネーやアルプスのスライドもご覧いただき、九十周年の話にも耳を傾けていただいたが、今回のご急逝は淋しい限りである。

ご葬儀には公的に一名が参列することになり、三十一日の斂葬には村木会長が、二十九日のお通夜には中村副会長が列席した。一方、斂葬や宮邸での記帳には、多数の関係会員が参上し、お別れを惜しんだ。

本会に対し、数々のご厚意を賜った秩父宮勢津子妃殿下のご薨去を私どもは衷心よりお悼み申し上げるとともに、豊島岡にある秩父宮殿下の比翼塚において、ともに安らかに眠りたまわんとを、心からお祈り申し上げる次第であります。(中村純二)

日本山岳会創立九十周年

中部ブロック記念式典と
フォーラム「南アルプスの
山岳環境と登山の将来像」

八月二十六日から二十八日まで、越後、信濃、静岡、山梨各支部合同による中部ブロックの九十周年記念行事が山梨県下で行われた。

二十六日は甲府市古名屋ホテルに四十五名が参集、午後二時半から記念式典が開催され、ひきつづいて三時から「南アルプス（赤石山脈）の山岳環境と登山の将来像」と題して、フォーラムが行われた。この後、懇親会が賑やかに開催され、翌二十七日、二十八日は編笠山（日帰り）、仙丈岳・仙水峠（一泊二日）の山行が行われた。

■フォーラムのあらまし

フォーラムは岡島成行会員（自然保護委員）の司会により、三重大学教授・渡辺定元氏（林学）、芝浦工業大学教授・高橋裕氏（河川工学）、山梨県芦安村長・望月義清氏のゲストスピーカーの話提供を中心に進められた。

また、東海フォレスト社長・内海登氏は山岳環境関連事業の立場から、本会会員の高室陽二郎（山梨県山岳連盟会長）、西郷正郎の両氏は山岳人の立場から発言された。

一、重要な意味を持つ南アルプスの
森林植生……渡辺教授

わが国の森林調査は明治十一年、内務省地理寮により始められたが、その最初の調査地は甲斐の国である。調査者の高島徳三は、南アルプスの垂直的森林分布を標高により四つの帯に分けたが、これは日本の森林帯の概念の最初のものである。

日本の亜高山帯の優占種は氷河期ごとに変化してきている。かつて優占したヤツガタケトウヒなどは後退してしまっているが、ハリモミは七十万年もの間、変わっていない特異な樹種だ。

南アルプスは日本列島の中で最も多くの固有種を有する（固有度が高い）地域だが、とくに亜高山帯でその傾向が大きい。南アルプスの中央構造線に沿った地域・フォッサマグナ地域には、種々の植物が依存する生活環境ができている。荒川岳の東斜面に生育するヒ

ノキは、標高差によって類縁関係の違いが見られ、この差は水平的な地域差より大きい。今後、遺伝子分析によって南アルプスの植物の特徴が解明されることが期待される。

中部山岳地域では造山運動の過程で、暖かい地域の植物が上のように運ばれ、新しい高山植物が生成された。北アルプスでは豪雪環境の影響を受け、これに適応したものしか残れなかったが、南アルプスでは、古い系統の種が残されてきたといえる。その代表的な場所が北岳だ。今後進むであろう地球温暖化の中で、寒さに適応した種が保存されていることは重要である。

南アルプスの森林は日本列島の中でも最もよく保全されている。これをどのように後世に伝えてゆくかが大切な問題である。また、北岳周辺の登山者激増・オーバーユースにより山岳環境が台無しになる恐れがある。取り返しがつかなくなる前に、何らかの規制が必要だ。規制については日本山岳会としても対応すべきだろう。

二、山が荒れれば河川も荒れる。山と
川は一体のもの——高橋教授

自然環境保全や開発のあり方を考える場合、山と川は一体的にとらえることが重要である。開発の手が入らない時代では、山の自然・地形、地質が川の性格を決めていた。しかし、人間の

手が上流まで入るようになると、開発のあり方が中・下流に影響する。

昭和三十年代後半頃から拡大造林が進められ、山はスギ、ヒノキの一斉林に姿を変えた。植林は必要なことではあったが、拡大造林は山にとっても、川にとっても不幸なことだった。森林は針広混交林のほうが生態系保持のためにも、流域管理上も望ましい。スギ、ヒノキ人工林は山村の労働力不足などから間伐や枝打ちが行われず、手入れが悪いが、このような林は災害にも弱い。種々の樹種が混交した森林が本来の機能を発揮する。

二十世紀は都市化、科学技術万能、物質文明の時代だ。我々の生活水準は向上したが、一方ではいろいろな矛盾が出はじめ、これに気がつき出したのが現代である。都市化の進展は農山村に過疎を引き起こし、人々に川の上流部のありがたさを忘れさせた。山に登るときは川にも目を向けてほしい。山が荒れていけば川も荒れている。国土の七割を占める山地の状態は極めて重要だ。山を守る人々を大事にしなければならない。そうでないと二十一世紀の日本の国土はどうなるか分からない。

三、登山客をどう受け入れるか、地元
側の悩み——望月芦安村長

小島静岡市長提唱の「南アルプスサミット」などが作られているが、今行

政は山に関心を持っている。話し合いの中心になるのは、自然保護と調和した利活用の問題、地元の活性化、地域開発の問題である。

かつて林業で栄えた私の村では、林業で生活することが不可能になっている。林業従事者の高齢化、減少が進む中で、林業をどう守るかが大問題だ。

林道の開通により南アルプスは便利になり、大勢の登山客がおしかけるようになったが、一方いろいろな問題が生じている。山小屋の定員超過は限界にきている。中高年登山者も増えてい

るが、安全対策は地元としても重要な問題だ。山小屋のあり方についても行政指導ができるような組織が必要と考

えている。このように、山岳環境保全につながる問題は山積みしているが、悪化しつつある現状にどう対処するかが当面の課題である。

*

話題提供に引き続いて、東海フォレストの内海社長、高室・西郷両会員から発言があり、最後に前静岡支部長・安間荘会員より、フォーラムは次のように締めくくられた。

「南アルプスではこれまでアブローチの不便さ故に、自然は比較的残されてきた。だが登山者が多くなれば、山岳環境に及ぼすマイナスの影響は大きく、登山のあり方の質をどう高めてゆくかが問題だ。我々は山岳人として質とは

平成七年度「海外登山基金」助成登山計画募集

海外登山基金委員会

平成七年度の海外登山基金による助成登山計画の募集を、左記のとおり行います。ふるってご応募ください。

対象 平成八年二月一日～平成九年一月末に出発する登山隊。会員の推薦があれば、隊の規模の大小は問いません。

申込方法 所定の様式(本会事務局に請求してください)に記入し、

登山計画書(十五部)を添付して申請してください。

申込締切 平成七年十二月二十日

審査ならびに交付の時期 平成八年一月中旬に審査を行い、二月の理事会で決定し、二月中旬～三月末までに交付します。

交付金額 百万円(金利の低下により平成七年度予算計上額より減)です。

何か、を考えていきたい。地元の人々と同じ土俵で話し合うことが大切だ。このフォーラムが一つの機会となり、さらに発展していくことを期待したい」

(編集委員・伊藤 敏)

中部ブロック・記念山行

仙水峠・仙丈岳

二十七日六時、車に分乗し広河原へ向けて古名屋ホテルを出発する。広河原までの南アルプス林道は、道幅が狭く谷も急峻で、よく開けたものだと感心する。広河原からは村営バスに乗り換え、九時の始発で北沢峠へ向かう。



快晴だが仙丈岳頂上は風が強かった

バスは約三十分で峠に到着。今日泊まる長衛荘はバス停の横にあり、仙水峠まで軽く散策することになった。仙水峠は、北沢長衛小屋から仙水小屋と約一時間の行程である。甲斐駒ヶ岳が目の前に迫り、その大きさに圧倒される。

二十八日五時、山荘前で点呼と山行の注意などがあり、出発。仙丈岳参加者は、静岡支部から前支部長の安間荘さん、越後支部からは井出秀雄さん他三名、地元山梨支部からは斎藤英子さん、また信濃支部からは井口謙司さん他十五名、総員二十二名である。

早朝の山登り、空気が冷たく気持ちがいよい。一気に三合目まで登り、朝食の弁当を広げる。やはり山での食事は美味しい。

六時、栗沢山から朝日が昇る。森林の中は伊那谷からの風が時折強く吹き、熱くなった体に心地好く感じられる。トリカブト、ソバナの紫の花がきれいだ。森林帯を抜け、ハイマツ帯を登り、八時、小仙丈岳に到着。風が強く、長袖のシャツを着る。

北に甲斐駒ヶ岳、鋸岳と大きく迫っている。西側直下に伊那谷を、また北に松本平から安曇野を遠望することができる。東には鳳凰山、南にいくに従い北岳、間ノ岳、塩見岳を望む。どの山も大きく雄大である。

仙丈岳までは約一時間、稜線に沿ってハイマツ帯を進む。チシマギキョウ、トウヤクリンドウが咲き、目を楽しませてくれる。

八時四十分頂上到着、三〇三メートル。風が強く寒い。腹ごしらえとわずかにアルコールを入れ、記念撮影後早々に下山する。十一時四十五分、長衛荘前で登頂と山行の無事を祝ってビールで乾杯。

山梨支部のおかげでいい山行ができたことに感謝し、また一緒に山登りができることを楽しみに、十四時、広河原で解散する。(信濃支部・小松正志)

中部ブロック記念山行

編笠山登山

八月二十七日七時過ぎ、古名屋ホテルを出発。小淵沢ICから八ヶ岳公園有料道路手前を左折し、観音平八時十五分着。二十三名全員そろったところで、山梨支部山村正光コースリーダーの行程説明があり、隊列を整えて出発。曇り、微風、雲海(標高一八五一メートル)着九時二十五分、押手川の分岐(二〇八〇メートル)着十時二十五分、ゆっくりと登る。後方に南アルプス連山のほぼ全容が見え、仙丈岳隊が登る仙丈岳や越後の六人衆のめざす甲斐駒ヶ岳もよく見えている。絶好の登山日

和だ。先頭・山梨の斉藤幸雄、中間・越後の田邊信行、後尾・山梨の所一路の三氏が無線で確認しながらの集団登山である。

編笠山(二五二三・七メートル)には十二時十五分到着、十八名が登頂した。南東に富士山が青黒く見え、南西に北岳、仙丈岳、甲斐駒ヶ岳、北に八ヶ岳連山が間近に見え、東に金峰山などが眺望できた。

ゆっくり休み、十三時三十分出発、青年小屋経由、押手川分岐十四時四十分着。透き通る水で作ったオンザロックが山梨支部からふるまわれ、すっかり気分をよくして延命清水口に十六時



編笠山からは富士山、北岳、甲斐駒、八ヶ岳、金峰と360度の展望

二十五分下山、さらに甲府駅まで送り届けていただき、記念登山は無事終了した。

山梨支部の皆様が周到に準備され、心地好い山行ができたことに感謝申し上げます。(越後支部・田邊信行)

エベレスト

ウィメンズ・サミット開催

六月二十三日～二十八日、世界最高峰エベレストの女性初登頂二十周年を記念して「エベレスト(チョモランマ/サガルマータ)・ウィメンズ・サミット一九九五」が開催された。

一九七五年五月十六日、エベレスト日本女子登山隊の田部井淳子さんがアン・ツェリン氏とともに世界最高峰の頂に立った。それから二十年間に、三十二人のエベレスト女性サミッターが誕生した。そのなかから日本を含む六か国十人と、カトマンズ在住のアメリカー人山岳ジャーナリストがパネリストとして参加した。

二十四日、日生ビル国際ホールでシンポジウムが開催され、三百人を超す聴衆が集い、当会の村木会長がお祝いの言葉を述べた。会はその国、その時代を背景に、エベレスト登頂前と後の自分の置かれた立場、考え方などを率直に話し合った。



さよならパーティーには女性登山家の大先輩も出席

翌二十五日、梅雨の晴れ間の富士清掃登山は、外国招待者と一般参加者百二十人が参加し、交流を深めた。山岳環境保護を推進しているHATJが今回の中心になっていることもあり、清掃活動に参加した外国招待者は初めての経験で、帰国して是非自国でも行いたい、という声が聞かれた。

二十七日のさよならパーティーには、本会から佐藤テル、今井喜美子、黒田初子の日本女性登山の草分けの三氏も参加し、賑やかなうちに閉幕した。

なお、この会の報告書はサミッター三十二人のアンケートとともに出版することになっている。(藤井正彦)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

白神山地・長場内岳登山

今年二度目の支部山行は、七月二日、県北部・白神山地の一角にある長場内岳（おさばないだけ、標高九四五・六メートル）で実施した。

長場内岳は山頂に一等三角点のあるところから、一部の好者によって登られていたが、一昨年、山頂まで登山道が整備され、その上先の世界遺産地域に指定された白神山地に隣接していることもあって、登山者の増加が予想される山である。

六時三十分、岡田支部長宅をマイカーを連ねて出発。小滝集落から岳林道経由、四十八滝林道を進んで終点の駐

車場に集まり、一行二十三名、九時三十分に歩き始めた。十分ほど後、沢分岐点でコースを誤り、右への植林地への道を辿ったところ、小沢に突き当たって道が消え、藪の急な小沢の登りとなってしまった。十一時、やっと道のある主稜線に出て、コースのミスを確認した。

一休み後、初めて姿を現した山頂を樹間に眺めながら進んだが、道は一部藪と化しており、先頭は鉈を振り振り進むはめとなった。緩やかな道も、山頂直下から急坂となったが、十二時から十二時三十分頃にかけて全員が次々と山頂に到着した。

途中一か所西側が開けて全域を眺望できる場所がある。対岸に焼山と次郎左衛門岳、その後方にニツ森が望まれ、ブナの原生林が眼下に広がる様は実に雄大である。後追いの佐藤委員一行三名が突如飛び入りし、総勢二十六名となり、やっと車座になった狭い山頂で賑やかな昼食となった。

十三時三十分下山開始。正常のコースを例のとおり山菜を採りながら下り、十五時半一同無事登山口に下山した。

恒例となったハシゴ登山は、帰路上にある茂谷山と巖山（のぼりやま）を選んだ。小さな山ゆえに、登山者からそっぽを向かれているが、古来から信仰などにより、ふるさとの山として味

わい深い山であり、毎回実施している。両山とも能代市の鶴形近くに入り口があり、前者は美しい富士山型、後者は造林の山だが山頂に一等三角点がある。登りわずか二十分と三分、ともに眺望がよい。降り出した雨の中、十八時過ぎ帰路についた。（佐々木民秀）

山形支部

清水弥栄治会員の追悼をかねて 蔵王熊野岳・清掃登山



イワカガミやツガザクラが彩る初夏の蔵王に清水会員を偲ぶ

六月十八日、梅雨期には珍しく真っ青に晴れた初夏の空の下、緑濃く光輝く蔵王山・熊野岳山行が、支部長以下十七名が参加して実施された。

今回の登山は、蔵王をこよなく愛し、私たち会員に親しまれていた清水弥栄治会員を偲ぶ追悼登山に、支部恒例の清掃登山を兼ねての催しであった。

当日は、八時・中央ケーブル駅の集合地点から車四台に分乗して菖蒲沼に至る。全身を深緑に染め、降りしきるセミの声を耳に登り始めた。初夏の山を彩るイワカガミ、ツガザクラなど山の花に迎えられ、蔵王山の象徴でもあるエメラルドグリーンの「お釜」を経て、熊野岳に着いたのは十一時過ぎ。

熊野山頂で、清水会員を偲んで一分間の黙禱をさげた後、折原会員の奏する「虚菩薩」の尺八の音色がじょうじょうと蔵王の峰々に、そして遙か遠く残雪をいただく朝日、飯豊の山脈にまた逝った人、生ける者の魂を揺さぶるかのように、流れて消えていった。帰途は登山道の清掃を行いながら、予定通り無事下山した。

逝きし岳友

岳友偲ぶ登路にあつき岩鏡
湧く雲に岳友の幻影岩つばめ
雲表や岳友を悼みし鎮魂歌

（今野秀穂）

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜七枚以内をお願いします)



カット 中村あや

新潟県山岳協会隊 カムチャツカの高峰 トルバチエク峰に登る

小倉 厚



強風と雪煙が舞う頂上で日の丸を広げる

永久凍土、ツンドラ、不毛の地と想像していたカムチャツカ。二日間の天候待ちの末、飛び立ったロシアの大型

ヘリの機上から見たカムチャツカは、その認識を大きく変えさせる緑豊かな明るい広葉樹林の世界であった。六月二十七日、州都ペトロパブロフスクⅡカムチャツキー(エリゾボヘリポート)から三〇〇キロの登山基地トルバチエクに向かう。ヘリの騒音の中、胸を熱くして脚下に広がる風景に見入った。進路は、カムチャツカ半島の東側に連



なるポストチヌイ山脈と南端に起伏するオパラ山との鞍部を抜けて、半島最大の河川、カムチャツカ川に沿って北上する。

トルバチエクは最高峰クリチエフスカヤの南二五キロの地点にある。東西の山々は雪と氷河をいだいて美しくカムチャツカ色に輝いている。広大、日本本土の一・七倍という。

新潟県山岳協会では、日ロ交流親善のもとにロシア領事館の全面的支援を受けて、このほど(六月二十三日〜七月三日)カムチャツカ半島のトルバチエク(三六八二メートル)に十三名の登山隊を送った(名誉総隊長・通産政務次官・参議院議員・真嶋一男、隊長・新潟県山岳協会名誉会長・室賀輝男)県山岳協会隊といってもほとんどがJAC会員で、私も隊員の一人に加えられる、存分に登山を楽しむことができた。

カムチャツカは

火山の国である。半島には百五十とも百七十ともいわれる火山があり、そのうち二十八座がいまなお煙を噴いている活火山である。入山の難しさもあって、日本人未踏峰は活火山

を除いて十座ほどであるという。今回はその最高峰トルバチエクが選ばれた。ヘリは濃霧のためベースキャンプ予定地「月の車」(地形が月面に似ているため月面輸送車の訓練に使われたのでその名がある)までは行けず、約六キロ下のチエルダックに着陸した。標高約九五〇メートル、森林限界にある。超大型の蚊の来襲に悩まされながら、ロシア海軍払い下げの超大型六輪トラックで、夕刻ようやくベースキャンプに入ることができた。広い殺風景な溶岩砂の世界であるが、それでも可憐なりしりヒナゲシの花とロシア側隊員の笑顔が我々を迎えてくれた。ベースキャンプはストーブを囲む日本の山小屋を思わせる快適なものだった。

ここまで来ればあとは天候よりも精神力あるのみ。翌二十八日、重い荷を背負い、前進キャンプに向かう。行程一五キロ、高差一〇〇〇メートル。霧、雨、雪にもめげず、ロシア娘の歌うカチューシャの歌に励まされ、カムチャツカヒグマの足跡におびえながら、いくつもの雪渓や湧水の流れを越えて、標高二二五〇メートルの地点に前進キャンプを設営した。

二十九日、白夜の一夜が明ければ快晴だった。ついに幸運の女神は我々の頭上にはほえんだ。昨夜の雪に山は美しかった。ここから山頂に軽装でピス

トンする。雪渓と岩稜の道、快晴といえども強風に雪煙が舞う。広い内院の雪渓を越え、頂上直下の壁で難渉する。ここでも遅いロシア隊員に助けられた。落石が起きる。「カミン」と叫び逃げる。カムチャッカの山はヘルメットが必携だ。

そしてついに午前十時五分、室賀隊長の持つ日の丸、そして黄色い新潟県山岳協会旗がトルバチェクの雪と氷の山頂にひるがえった。日口両隊員は抱き合い、握手。登頂を喜び、日口交流はその極に達した。

「スバシーボ ハラシヨー 万歳！ 万歳！」

トルバチェクの火口は凄絶をきわめ、三〇〇〜四〇〇メートルの断崖となつて地底に沈んでいた。人を寄せつけない凄さがあつた。一九七五年の噴火という。みんなは記念に光る石を拾った。全員登頂を目指したシルバー登山隊であつたが、残念ながら十三名中九名しかも日本人初と思われたこの登山も、JAC東海支部・篠崎純一隊長以下五名の隊員による環太平洋一周地球環境調査隊が六月二十二日、この山頂を踏んでいたことが後日判明、新潟県山岳協会は第二登ということになった。しかし、素晴らしいカムチャッカの登山、そしてまた素晴らしい仲間たちのことを私は生涯忘れられないだろう。

海外の山

ペーパー・ロード

江本嘉伸

パンチェン・ラマの転生活伝の認定をめぐるトラブルなど緊張が伝えられるチベットだが、手作り紙の伝統を復活させようというユニークな活動が一方で始まっている。

「チベット紙の道(PAPER ROAD / TIBET)」とこのプロジェクトを発足させたのは、アメリカの紙工芸家たち。西バージニア山岳研究所やエベレスト環境プロジェクトなどが協力し、記念のTシャツを売って、当面の活動資金を生み出した。

リーダー格のトム・リーチは一九九〇年、ロバート・マッコネル以下のアメリカ清掃登山隊に同行し、ロンブク僧院の僧たちに段ボールなどのゴミから紙をリサイクルする方法を示してみせたことがある。今年六月には、紙工芸の審査員として国際的に知られるジェーン・ファーマーら四人のチームで、チベットへ「紙の道」をたどった。

一九三五年にギャンツェで撮影さ

れた昔ながらの紙作りの写真のコピーを老人たちに見せながらラサカロンブクと紙作りの伝統を探す旅を続け、ラサ、ギャンツェ、シガツェで、かつて紙を作ったことがあるというチベット人と出会った。そして彼らの多くがチベット紙の再生を願っていることを知った。

「ラサの南のニエモという村で六十歳になる農民が、原料になる植物の根を見せてどうやって紙を作るか示してくれたんです。祖父も父親も代々紙作りの職人だったようです。いつでも自分の紙作りの技術を教えるから、と言ってくれて」

十月ははじめ、京都で開かれた「国際紙シンポジウム」のため来日したファーマー夫人は、予想外の「成果」を嬉しそうに話し、日本のヒマラヤニストたちの理解を呼びかけた。

河口慧海の『チベット旅行記』には、經典の版本とそれを印刷する紙についての記述がある。本は当時ラサのチョカン寺の前の露店で売られていたが、貴重な書物や経文は特別に版木のある寺に注文しなければならぬ。そのため、まず紙を買いそろえる必要がある。

「その紙は紙の樹で掬えたものでなく草の根で掬えるのです。その草は毒草で、根もやはり毒です。その根

は白い色で繊維が沢山ある。その繊維でもって紙を製造します。紙質は随分強いが真っ白な紙はない。少し黒くって日本の塵紙のようなものである」(講談社学術文庫版)

河口の後、セラ寺で十年間修行した多田等観も、經典類の入手にあたって紙のことに言及している。

「木版刷を刷るにしても、おいそれとすぐに紙などが揃っているのではないのであって、まず紙から用意しなければならぬ。それも一年のうち暖かい気候のうちに、ブータンの国境から売りに来る紙を買い占めることから始める」(ラサの本屋さん)『紀伊国屋書店読書月報』机

一九五六年九月号所収

「紙作りというのは、とても重要な文化だと思ふのです。チベットの暮らしに根ざした紙を復活させることは、そんなに難しいことではない。だからが少しのお金を出して紙を注文すれば、まだ作れる人はいるのですから」とファーマー夫人。

ロンブク僧院では、五年前、ゴミから紙を作る方法をリーチが伝えた若いラマ僧が、一行をあたたかく迎え、外国の登山家たちが持ち込む紙類のリサイクルに熱意を示した。「宴会行事」大好きな日本の山岳会に、参考になる話だ。

俳句

北岳へ

小林碧郎

早発ちの灯すや夜鷹鳴きいづる
 桐ふかく夜明けを呼べり虎つぐみ
 駒鳥や金の朝霧ひびかせて
 やり過す靴音おもし岩かがみ
 雪溪に日照雨かがやき鳴く目細
 汗垂れて落石に耳聴くをり
 巖攀づる声壮んなり雨つばめ
 馳せめぐるおこじよの岩に雲間草
 ふたたびの雷間近なり岩梯子
 岩灼けて北岳草の残り花
 実を抱く這松の花くれなるに
 雷鳥や誘導鐘に喚ばれをり
 雷鳥の雛まろびゆくちんぐるま
 雷避けて這松の香にまみれけり
 大雷雨尾根に天幕のいさぎよし
 雲海の薔薇色つくす日の出まへ
 薄雪草朝露を日に捧げけり
 這松の風にうたふや茅くぐり
 雲海に沈みて朝の縦走路

(馬酔木同人)

グライドと草棒

小荒井実

雪崩は、ドラスチックでパワーにあふれたものです。多雪地方では雪崩注意報が頻繁に発令され、被害も多いのです。

眼前に雪煙が舞い上がり、轟音を響かせて谷底へ落下する巨大な雪崩を一度は見てみたいと思っています。

一方、途方もない破壊力を持った雪崩に対し、緩やかな斜面をゆっくりゆっくりとずり落ちる雪崩もあります。スリップとは違い、底面から滑るグライドと呼ばれる雪崩です。

谷間をうずめた大量の積雪が毎年のようにグライドとなって発生するところは表土が削られ、基盤岩がむき出しになっています。基盤岩は一枚板のようなものとなって残雪は滑りやすくなり、グライドが発生します。

谷間を埋めた大量の残雪は滑り落ちるときに草や木の枝、小石、土砂などを巻き込みながら、ゆっくりと氷河のように緩やかに滑り落ちていきます。

巨大な残雪は巻き込んだ草や小石、枝をコロのようにして緩やかに下ります。残雪が移動するとコロは転がり、やがて写真のような「草棒」を作り出します。これは中心となる核としての木



たしているのですから驚きます。

草巻石については『山岳』第七十八年(一九八三年)で詳細な発表をなさっています。このなかでは「草巻石」とのべられています。会津の金山町御神楽岳では単に「草棒」と呼んでいます。「草巻石」の名は、中心となる核があり、核(石)に草などが巻き込まれたものとの考えに立つからです。実際は必ずしも核となるものは必要ないのです。草や土などだけでも立派な棒のようなコロとなって見られます。すから草棒と呼んだのです。

昨年は、晩秋の初雪が根雪となり、

の枝(これはタニウツギ)に斜面にある小石や木の葉スゲ、キンコウカなどの草が残雪の移動により巻き込まれ、棒のようになり、たもたもたの重量物を移動させるときに使うコロのような役目を枝や草本類が果たしているのですから驚きます。

降雪の期間が長かったのです。春季には大量の残雪をもたらし、グライドの発生も例年より多くなっています。珍しい草棒を飯豊連峰や御神楽岳で見ることができました。

ミッテルレギ稜にて

砂田定夫

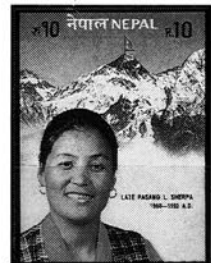
今夏グリンデルヴァルトに一週間滞在した。ミッテルレギ稜(東山稜)からアイガーに登頂することが主目的であり、一九二一年にこのルートの初登攀を成しとげて日本の登山に影響を与えた植有恒氏の足跡にふれてみたい、という気持ちがあった。

八月一日、ミッテルレギ小屋に泊まった。ガイド組合の所有というこの小屋は狭い稜線にコンパクトに堅牢に造られ、スペースを実に有効に使っているのに感心した。ガイドと登山客のペア四組が二棟ある小屋の頂上よりのほ

山の切手

エベレスト

相山之良



1994年ネパール発行 パサン・ラムの肖像、背景にエベレスト、頂上にネパール国旗。

初登頂から四十周年の節目を迎えた一九九三年のエベレストには、春のシーズンだけで十九隊もの登山隊が殺到して登頂を競った。

パサン・ラム・シェルパ（一九六〇年生れの三十二歳・女性）も、サン・ミゲル・ビルをスポンサーとする隊を率い、ネパール女性としては初めて登頂を狙った。ラムは、九一年に頂上直下の八七五〇メートルまで達しており、これが四回目の挑戦だった。

同じ時期、インド・ネパール合同女性隊が組織され、ラムもその一隊員として招かれたが、合同隊長格を望んだため意見が食い違い、急遽独自の隊を編成したのである。ライバルのインド合同隊には、二人のネパール女性が参加していて、それに遅れをとるまいと、日程の余裕がないまま頂上を攻撃することになった。

四月二十二日、ラムはソナムら五人のシェルパとともに頂上に立ち、ネ

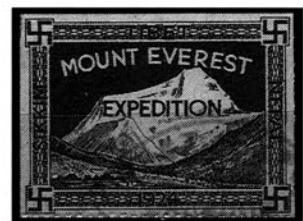
パール女性初の登頂に成功、ソナムは五回目の登頂を果たした。しかし、帰途は南峰まで戻るのが精一杯で、ラムとソナムはビバークを余儀なくされた。その後天候が悪化し、救援隊が現場に到着したとき、ラムはすでに遺体となっており、ソナムはザックを残したまま行方が分からなかった。

死後のラムは、政界やマスコミから聖人視され、ネパール政府はヒラリー卿と同格のザ・スター・オブ・ネパール勲章を授与し、パサン・ラム登山学校の設立、パサン・ラム通りの創設、遺児に対する養育費の贈呈などで報い、記念切手も発行された。

なお、エベレストを描く切手は、十一年日本山岳会隊登頂、七五年女性としての初登頂にはじまり、今年日大隊の北東稜初登に至るまで、エベレストにおける日本の活躍は目覚ましいが、切手の発行がないのは残念なことだ。



1982年ネパール発行 国際山岳連盟結成50周年を記念する総会がカトマンズで開催された。エベレストを描く切手のなかでは出色のものである。



1924年イギリスの第3次遠征のさい使用されたシール。エベレストを描く世界最初のもので、22年と24年の隊員であったノエル大尉が作った。

うでテーブルを囲み、肩寄せあって夕食のひとつを過ごした。私を除けばガイドも登山客もスイス人ばかり。彼らの話は弾んでいたが、そのうちガイドの一人が話に入らなかった私を気遣ってか、壁に掛けられた古い肖像写真をさして「この方は日本人だが知っているか」と話題を変えた。二枚掛けられた植有恒氏の写真のうち若い頃のものであった。「もちろん知っている。初登攀をされた植さんだ」と答えると同時に彼らも口をそろえて「ユーコー・マキ」とその名を称えた。地元のガイドたちの間には、当時の難ルートを開拓したうえ、この小屋の建設に多大の寄付をされた先駆者の功績がしっかりと語り継がれているようだった。私も植氏の栄誉を支えた三人の山案内人の一人で本会名誉会員のサムエル・ブラヴァント氏の名をあげて、日本の登山界で名を知られている、といった意味の話をしたところ、若いガイドたちの表情に先輩への尊敬と誇りとも思える反応があったのが印象的であった。この日はスイス建国記念日に当たり、グリンデルヴァルトで花火が打ち上げられたりして美しい夜景を俯瞰でき、忘れられない一夜となった。

翌日の登山は、十年のブランクのある岩登りの感覚はすぐ戻ったものの、スピーディーな登攀ペースを追うのが

短歌

ふたりの頂

— 創作絵本に添えて

宇都木慎一

頂をめざさんとして山の朝凍てつくテ
ントに朝の陽まぶし

テント出でて朝焼けの雪にしるす第一
歩頂めざさむ思ひさだまる

山肌を刻むがごとく歩を運ぶ高みをめ
ざし友と二人で

頂稜は未だ^{いま}はるけし深き谷をへだてて
我らを拒むごとくに

あえぎつつ登る雪尾根果てしなしあこ
がれの峰我らを招く

山の友と心とを結ぶ一本のザイルに血潮
は流るるごとし

確保せる友の笑顔に目で応ふピッケル
振りに雪庇越すとき

来し方を返りみすれば乗越に続く我ら
の確かなる跡^{トビス}

やっとだったが、かつて六十九歳という高齢でこのルートを登られた佐藤久一朗氏の事例を思い起こし、自らを励まして登った。現在ルートは整備されて三級程度になったといわれ、天候の安定している昼過ぎには西壁を下りきれるようになった。しかし七十四年前の初登攀当時の諸条件を考えると今では考えられない困難があったと想像され、それを克服した先人たちの勇気を思わずにはいられなかった。

たまたま帰国してから不在期間中の新聞を読み返していたら、田部井淳子さんが七月末に同ルートを登られ、ミッテルレギ小屋で先人の偉業に感動されたという記事が載っていた。この小屋を訪れ、この山稜を登る多くの登山者がそれぞれ感動を享受する。その背景に先人のひたむきな努力があったことを、現地を訪れ改めて実感した次第である。

登り残していた山、悪沢岳

橋村一豊

大井川の奥へ向かう車道は、小無間山からくる外山沢の先に発現した大難(崩落)に掃蕩されて断絶し、トンネルを掘っての再開通は二年後だという。河床に下り、薙を迂回して東海フォレ

山と医療

歯をくいしばって
頑張る

滝 紘之

す。たった1本、奥の歯が欠損していたために、今年はホームランを思い通り打てなかったといった話を、有名なプロ野球のバッターが言っていました。

それで、ここ一番というときの瞬発力や、頑張り抜く持久力は、しっかりした咬合状態をもっていないと保てません。歯並びがよくて咬む力が強い人ほど運動能力は高いといわれています。

繰り返す言えば、よく発達した顎に生えた歯並びのよい歯、よく手入れされた口腔、それをもってよく咬んだならば、その人のもつエネルギーが最大に発揮できるわけです。神社などの急な階段や梯子、急斜面を下るときに、口を開いたままで下ることを想像してみてください。そんな人は姿勢が安定せず、最悪の場合は転落事故にもつながると思います。

結論としては、大きな登山をする人も、楽しいハイキングをする人も、平生、虫歯や歯槽膿漏、あるいは義歯のチェックを受けて、よい咬合状態を保つようにしたいものです。

口は健康の窓口といわれ、美味しい食べ物を摂る取りこみ、人の意思の伝達、楽しい会話、咀嚼など、たくさんの機能をもっています。

咀嚼は、口をつかさどる顎と歯で行われますが、歯に関する言葉もいろいろ見受けられます。歯ぎしりして地団太踏むとか、歯をくいしばって頑張る、などこ一番ふんばるときに、「歯」が出てきます。しっかり咬めること、つまり咬合は大事なことだということがわかります。

たとえば、奥の歯が1本欠けているとしますと、重要なときに、決定的な力が入らず、結局はあきらめるということも起こりがちで

ストの送迎車発着所へ登り返すのに三十分の歩きがある。そこから車だと二時間で二軒小屋へ入れ、転付峠越えの汗だくの八時間歩きを省けるのは老人にはありがたい。その夜は森に囲まれた静かな二軒小屋に泊まった。八月初めの暑い日だった。

翌日は曉闇に出立し、「悪沢岳へはこの道から登る」と前から決めていた

万斧沢の頭を越えて行く尾根にとりつく。きつい登りで知られるこの道をゆく人は少なく、この日は私を含めて四人だけ。下半の急登で暑さにやられ、千枚小屋分岐まで来ると疲れたので登高を打ち切り小屋へ下った。十一時四十分。午後はワインで昼寝など休養にあてた。夕方、東方の空に夏日の余照を受けた富士が暖赤色に染まって浮か

頂の雪踏みしめてともに立つあこがれ
と夢はわれらのものに

文字どほり「絆」となりて結び合ふザ
イルたぐりてほほゑみ交はず

短歌

土肥正毅会員追悼 一周忌に

伊佐九三四郎

マッキンリーエベレスト駆けし君なれ
ど何故に急ぎし浄土への旅

エリトリア国ダバラフ島に逝きし君み
まかれる時も熱き日なりや

世界地図刻りたる墓石に夏の日の烈し
く注ぐ一年の忌よ

カナトコ雲影絵に映す夕日あり西方弥
陀の浄土にて待つか

我が子には太郎花子の名がよしと酔ひ
て語りし奥多摩の春

月光をひきいれし天幕に尽きぬ酒大峰
山中遠くなりぬる

山本朋三郎・南アルプ千枚より荒川三山



び、その右下に蟠踞する笹と布引は闇
に吞まれつつあった。

第三日もまた暁闇出立で、千枚岳で

日の出を迎えた後、光漲る恵沢岳に着
いた。下界の猛暑もこの高みまでは届
かず、風が涼しく歩きは楽になる。北
岳と聖岳が間ノ岳と赤石岳の巨軀に隠
されているのは、駒から光までの南
アの山はすべて見えた。西には駒から
恵那山までの中央アの連なり、東には
富士山があった。大井川西俣からの谷
風の吹上げが強かった。

私が南アで登り残した山は恵沢と農
鳥で、その宿願の頂きを素晴らしい快

晴の朝に登れて幸せだった。石に座つ
て頂上を吹き抜けてゆく風の音を聴き、
頂上酒の盃を傾けた。この日を期して
持参したル・シャンベルタン®(ジョ
ーゼフ・ドルーアン)のボトル。

楽あれば苦ありは山の常で、ここか
ら先の行程ではこんな悠長なお楽しみ
の暇はない。荒川二山を渡って荒川小
屋へ下り、水と食事。大聖寺平へ上る
大トラバースでは足がよろめく強風で、
行き交った重荷大縦走の大学生の行列
も乱れていた。小赤石の登りにかかる
頃には強風もおさまり、小沢川の広河
原を見下ろすと昔の思い出が蘇った。

大学山岳部の秋山行で私たちは北岳か
ら光岳へ向かったが、大雪がきて、塩
見越え、荒川越えでは新雪漕ぎと岩の
結氷で難渋をきわめた。やむなく小沢
川へ下ったが、冷たい急流に腰まで没
するザイル確保の渡渉二十四回、立ち
木を切り倒しての架橋三回など、苦し
く危険いっぱい谷下りを日没まで続
けて人里に出た。小沢川ルートには今
でもあの悪い渡渉があるのだらうか。

榎島への下り口(赤石東尾根)に荷
をデポして、私にとっては三十八年ぶ
りの再遊になる赤石岳に向かった。赤
石沢南俣の巨大な空間を隔てて聖岳が
ドッシリと立っていた。頂上から見下
ろすとすぐ下にある赤石小屋だが、二
時間歩かねば着かない。赤石岳から大

井川河床の榎島まで比高で二〇〇〇メ
ートル、赤石小屋から下の二四〇〇
メートルが長くてとくにきつい。東尾
根の標高二三〇〇メートル地点から下
は密林で眺望皆無、風もなく、下へ行
くほど暑い。ウンザリするほど下りに
下り、オーバーヒートで頭はボケ、膝
は笑う頃、やっと榎島にたどり着いた。
十七時。

榎島ロッジの大きな檜の湯舟に身を
沈め、満ち足りた心で三日間を振り返
った。この山域のスケールの雄大さと、
山々の品位個性の優れていることに改
めて感銘しつつ。

味の技、心でつくる



むさし 坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

むさし 坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし 坊 麹町店
(有楽町線麹町駅)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし 坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友藤ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

図書紹介



カット 中村あや

伊佐九三四郎・著

『キリマンジャロの石』

— 辺境の山・旅 —

「その風景と、そこに住む人間とは深いかかりをもっている。景観を楽しむこともさることながら、どちらかというと人間に興味をもつことのほうが多い。」

厳しい自然環境と上手につきあって生きていく人々の姿をみると人類の知恵の偉大さを改めて知らされる。……そんな興味に誘われて次の山旅もまた少数民族が住む地域へと足を向けてしまいうのである」

一九八二〜一九九三年にわたって、キリマンジャロ、キナバル、大姑娘山、西藏紀行、中朝国境、アムネマチン、カラコルムハイウエーへ旅したものを「山と溪谷」などに掲載したものに加筆し、表題の本を上梓した。

その風景と人々とのふれあいを通して著者の思い入れがひたひたと伝わり読み手をも辺境に誘う一冊である。

一九九五年四月 現代旅行研究所発行 二三七ページ 二千元

(細井澄子)

斎藤清明・編

今西錦司初期山岳著作集

『初登山』

これは、全十三巻の増補版を含めての『今西錦司全集』には載らなかった、二十歳代以前の若き今西氏の著作を集めたものである。十四歳の時の富士登山を含む、宿題のための日記から始まり、二十九歳の、盟友高橋建治氏が本場のアルプスから持ち帰ったスキー技術に対するコメントの「アールベルグ派批判」までを含む、山行の記録を主とした著作の数々を網羅したものといえる。

学生たちの間に初期のアルピニズムが浸透していく時代の雰囲気を知るには、またとない本である。とはいっても、の中には、「文芸 鏡の世界」という小説や、「西堀氏の数学」と題した西堀榮三郎氏の「数学の誤り」という一文に対する反論なども含まれており、若き日の今西氏のほほえましい人柄を彷彿とさせるものもある。読んで

楽しいものであると同時に、資料的にも大変貴重な本といえるだろう。

随所に、編者斎藤清明氏の解説が入っていて、今西氏の著作や業績になじみのない人にも近づきやすいものとなっている。

一九九五年四月 ナカニシヤ出版発行 三一八ページ 二千八百円

(山口裕一)

田淵行男・著

『山は魔術師—私の山岳写真』

著者は山岳写真家であり、また高山蝶などの生態研究家でもある。しかもナチュラリストとしてその足跡と功績は高く評価されながら、平成一年五月惜しくも執筆なかばにして逝去された。本書は「岳人」に昭和四十年一月号から十二月号まで連載された「田淵行男・山岳写真講座」を骨子としてまとめたもの。「私の山岳写真」(昭和三十九年刊)の続編でもある。

本書の出版に当たり晩年、著者と親交のあった写真家・水越武氏が全面的に協力、三十余年ぶりで目の目を見ることでできた。ともあれ著者にとって本書の実現は念願であった。三十三冊目の著書である。

たんなる写真集(モノクロ)でなく作品を事例として技術的な意味をもた

せながら構成、十項目六十七点でまとめられている。たとえば「構図とテクニク」といったように作例写真で意図する表現技術を別ページで解説している。

作例とはいえモノクロームの一枚一枚はまさに「田淵行男傑作選」である。

一九九五年三月 実業之日本社刊ブルーガイドセンター発行 二二九ページ 四千五百円 (羽田栄治)

国民旅遊叢書

『大台北地区近郊登山手冊』

台北周辺の山のガイドブックである。山塊ごとに半ページから一ページくらいの解説(中国語)に、カラー写真、概念図、コースタイムが添えられており、台北市を中心とする台湾島最北部の山の概要を知ることができる。登場する山では大屯火山群の七星山(台北の北、一一二〇メートル)が最も高く、あとは一〇〇〇メートルに満たない山が多いが、いずれも森林が濃く奥深さを感じさせる。ただし、台北近郊の山野でも毒蛇をよく見かけるとして、毒蛇と蜂への注意を呼びかけている。標高からして当然であろう。

中華民国健行登山会編集 交通部觀光局発行 B6判 二〇八ページ

(南川金二)

田部井淳子・著
『山の頂の回廊』

著者の行動力、実行力にはかねがね驚嘆、感動しているが、この『山の頂の回廊』は、「これまでにさまざまなところで書いてきた文章をもとに、積み重ねてきた自分の歴史のなかの思い出深い出来事を振り返りながら、今の私」を飾らずに書き留めて見た。」といっているとおり、著者のこれまでの集大成ともいえる、登った山や出来事、自然を語り、環境問題を考え、現在のHAT・J日本代表としての忙しい日々を綴り、そして家庭の主婦として、また母親としての生活、日常の姿を生きて著している。

公人としての活躍の合間を縫って、個人の山も十分に楽しんでる様には本当に驚いてしまう。これだけ時間を有効に使えたら素晴らしい。周囲の理解ある人々、これまた著者の人柄に起因するものなだろう。著者のファンならずとも著者を理解するには格好の書といえるだろう。

平成七年六月 佼成出版社発行
二三五ページ 千三百円

(渡辺玉枝)

書籍受入報告 (1995年 8月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
圖書出版 (編)	韓國國立公園 (写真集: 英・韓二ヶ国語版)	153pp/26cm	国立公園管理公團	1994	韓國山岳会寄贈
圖書出版 (編)	韓國國立公園 (写真集: 英・韓二ヶ国語版)	155pp/26cm	国立公園管理公團	1995	韓國山岳会寄贈
韓國海外宣伝研究会 (編)	韓國の国立公園 (写真集)	116pp/30cm	国立公園管理公團	1994	韓國山岳会寄贈
博士山ブナ林を守る会 (編)	ブナの森とイヌワシの空: 会津・博士山の自然誌	313pp/22cm	博士山ブナ林を守る会	1995	発行者寄贈
同人シルバートール	ダウラギリ I 峰登山報告書1994: カランコランの山	48pp/26cm	同人シルバートール	1995	発行者寄贈
登山隊 (編)			登山隊		
山口宏 (編)	メントーサ (Menthosa) 1993: インドヒマラヤ登山隊報告書	57pp/26cm	日本山岳会東海支部	1994	発行者寄贈
丹沢溪谷調査団	丹沢の谷110ルート: 全踏査! ルート図・登攀図収録	255pp/22cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
福田文二	山なみ遙か: 福田文二遺稿文集	280pp/22cm	無明舎出版	1995	発行者寄贈
市川正 (編)	ライラ (LAILA) 1994: 東京白樺会カラコルム登山隊報告書	112pp/26cm	東京白樺会	1995	発行者寄贈
窪田空穂記念館 (編)	日本アルプスと近代詩歌 (平成7年度特別展・特別誌)	30pp/26cm	窪田空穂記念館	1995	発行者寄贈
桑名一博 (編)	西和辞典 (Diccionario Espanol-Japones)	2078pp/18cm	小学館	1991	後藤塚史氏寄贈
The Himalayan Club	The Himalayan Journal (Vol. 51, 1995)	299pp/22cm	The Himalayan Club	1995	発行者寄贈
The Alpine Club	The Alpine Journal (Vol. 100, 1995)	372pp/23cm	The Alpine Club	1995	発行者寄贈
South East Ladakh Expedition	The South East Ladakh Expedition 1995 Report	8pp/30cm	South East Ladakh Expedition	1995	発行者寄贈

この機会に、「山の文化的遺産」をぜひお揃え下さい!

日本山岳会企画編集商品特別頒布

《日本山岳会企画編集商品特別頒布》

① 覆刻日本の山岳名著
日本山岳会企画・編集 大修館書店発行
18点22冊+解題書+特別資料セット
定価 195,700円
会員特別割引価格 176,130円

② 新選覆刻日本の山岳名著
日本山岳会企画・編集 大修館書店発行
20点29冊+解題書+特別資料セット
定価 180,250円
会員特別割引価格 162,225円

③ 日本山岳会「会報」第一集
日本山岳会企画・編集 大修館書店発行
覆刻合本1号、100号(昭和5年、15年)
定価 12,360円
会員特別割引価格 11,124円

④ 日本山岳会「会報」第二集
日本山岳会企画・編集 大修館書店発行
覆刻合本101号、200号(昭和16年、昭和33年)
定価 14,420円
会員特別割引価格 12,978円

⑤ 図説百科山岳の世界
N・ティールファース 他著 西堀栄三郎・宮下啓三 監訳 大修館書店発行
定価 18,540円
会員特別割引価格 16,686円

* ①の山岳名著セットには③が、②の山岳名著セットには④が含まれています。

【会員特別割引価格実施期間】 1995年5月、12月

【申込・問合せ先】 日本山岳会事務局 (電話03-3261-4433)
【申込方法】 振替用紙に商品名・部数・金額・住所・氏名・会員番号を明記の上、直接事務局へお申込み下さい。

* それぞれ部数僅少につき申込順に送付致しますが、品切れの場合はご容赦下さい。

大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 電話03-3294-2221

INFORMATION



◆シンポジウム

「最近の山岳通信の進歩」開催

科学委員会

科学委員会では、移動通信(携帯電話やポケットベル)の普及やGPSのような人工衛星を使用した通信技術の進歩に着目し、登山者や山岳関係者の立場から、これらの最近の技術をいかに有効に使用するか、また現状の問題点と将来の展望について、シンポジウムを開催することにしました。多数のご参加をお待ちしています。

日時 十二月二日(出)

十三時三十分～十七時三十分

演題と講師

一、従来の山岳通信網について(アマチュア無線の利用を含めて)

電気通信大学名誉教授・本会会員

芳野起夫氏

二、移動電話の活用と、通話区域の検索及び人工衛星を利用した近い将来の移動通信

NTT移動通信網(株)電波部長

酒匂一成氏

三、GPS衛星による位置の決定および今後の新技術の山岳通信への応用

日本無線(株)研究所部長

北条晴正氏

四、気象衛星による雲写真のリアルタイム受画

(株)エーオーアル取締役

根岸秀忠氏

五、パネル討論

場所 青山学院大学総合研究所ビル

十一階十九号会議室

(正門を入ってすぐ右側のビル)

*青山学院大学へはJR渋谷駅下車

徒歩十分 地下鉄表参道駅下車徒歩五分

会費 千円(予稿集ほか)

受付 参加希望者は当日直接会場へ

問合せ TEL・FAX ○三―三四八八―四

六七八 森まで

◆沼尻・集会スキー懇親会の詳細

お知らせ 集会委員会

日時 平成八年一月十二日(金)～十五日

場所 沼尻温泉・磐梯沼尻高原ロッジ

日程 十二日(金)新宿スバルビル前二十二時

集合 貸切バスで現地へ

・十三日(土)高原ロッジ近辺でスキー、

希望者にはスキー指導

・十四日(日)箕輪スキー場でスキー、

山スキー派は西大嶺までツアー

・十五日(月)沼尻スキー場で半日スキー

後、バスで東京へ二十二時解散

参加費 三万円(二泊三日 親睦会費

含む) 交通費一万二千元(バス利用の場合)

◆丹水会十五周年記念集会

一、例会

日時 十一月十八日～十九日

場所 中川温泉

ハイツ&ヴィラながわ

二、丹水会十五周年記念展示会

場所 厚木市プロミティ厚木

期間 十二月二日～六日

募集 後日要領を関係者に配布

◆爽やか山行

猪狩山―猪鼻(二万五千・三峰)

緑爽会

亥年にちなんで、猪狩山八八二メー

トルに登り、猪鼻の集落に下ります。

晩秋の一日、元自然保護委員OBの集

まり緑爽会の山行に参加してください。

日時 十一月二十三日(木)

コース 西武池袋―三峰口―バス―古

池―猪狩神社―猪狩山―三峰分

創立90周年記念事業募金応募状況

(9月6日現在) 累計/1,490人/3,981口/19,904,603円

●6口(30,000円)

竹内佐郎

●4口(20,000円)

大橋晋 岩瀬秀郎(計10口)

池場孝昌 福田光子(計6口)

鴨下重彦

●2口(10,000円)

並木佐吉 川上忠義 平野彰

沢井増夫(計4口) 牛木素吉

郎(計4口) 関孝治 早川瑠

璃子(計4口) 中村明治 林

豊敏 青木伸雄 曲義則 高比

良昭 荒武八起 杉田博(計4

口) 降旗義道 工藤泰幸

本田卯太郎 木本義雄 錦織保

清 宮本貞雄 吉田紘臣 湯口

康雄

●1口(5,000円)

松村進 中島文夫 吉見良一

木本慶太郎 木本礼子 船田洋

子 松林のり子 稲田正則

岐一山の神一猪鼻一三峰口一池袋(歩行約四時間)

集合

西武線池袋駅七時十五分発急行三峰口行車内後部(三峰口九時二十一分着) または池袋七時三十五分発西武秩父行き(九時二十五分着) お花畑九時三十三分発に乗り換え三峰口へ 両神村営バス十時十分発に乗車

参加費 三百円(保険料)

申込 葉書またはFAXに氏名、会員番号、住所、電話番号、生年月日を明記の上十一月二十日(月)必着

一八九 東村山市萩山町五一六一二〇一三〇二 山口悠紀子

FAX・〇四二三一九五一六五六三

◆第十五回ヒンドウキシュ・カラコルム研究会

カラコルム研究会

ヒンドウキシュ山脈やカラコルム山脈、あるいはパンジャブ・ヒマラヤのナンガパルバット山などをどう登るか、本年の登山隊の報告と現地情報、またこの地域の文化について登山の視点から研究する集まりです。

日時 十一月二十五日(土)十三時三十分

(二十六日(日)十二時まで)

場所 八王子・大学セミナーハウス

会費 一万二千元(一泊二食、懇親会費など)

申込 葉書またはFAXに住所、氏名、電話番号を明記の上、十月三十一

日までに 二五二 藤沢市湘南台二一三六一一 広島三朗

FAX・〇四六六一四五一六八〇一

◆会報「山」合本・製本のお知らせ

会報五五一号から六〇〇号の合本をご希望の方は、次の事項をご了承の上、現本を十一月三十日までに日本山岳会・事務局宛にお送りください。

一、今回から製本業者が変わります。

このためこれまでと同一内容の装丁はできません。

・全面同色(ブルーグレー)

・コーナー(角)の補強なし

・表紙中央の山岳会マーク型押し・金マークなし(ただし、会員番号は背文字下部に印字可能)

二、「会報」のバックナンバーは各号百五十円です。必要な方はその旨お書き添えください。ただし既に欠号もありますので、その場合はコピーで代用になります。

三、あらかじめ各自で号数の入れ違いのないようご確認の上、お送りください。お送りいただいたとおりに製本いたしますので、索引の位置(巻頭か巻末)には十分ご注意ください。

四、製本費用は、梱包・返送費合わせて五千円です。ただし来室受け取りの場合は千円引きですので、その旨お書き添えください。請求書は書籍発送の際、同封します。(事務局)

領布図書リスト

書名	価格	著者名	出版社	発行年
1. 此の糧(詩集)	1,000円	尾崎喜八	二見書房	1942
2. 銀嶺に輝く: 窪田・田部兩君追悼記念 (箱なし)	3,000円	相山正雄	東大スキー山岳部	1930
3. チベット旅行記(旺文社文庫)	500円	河口慧海	旺文社	1978
4. ジュガルヒマール登山隊報告書(1960年3~7月)	500円	東海地区山岳連盟(編・発行)		1964
5. 山と書物[再版]	3,000円	小林義正	築地書館	1960
6. 高山深谷: 第9輯[1933年版]	2,000円	日本山岳会(編)	梓書房	1933
7. アルプス・ヒマラヤ處女峰登攀史(カバーなし)	1,000円	藤田信道(訳著)	山と溪谷社	1931
8. 富士の研究(1): 富士の歴史(箱なし)	3,000円	浅間神社社務所(編)	古今書院	1928
9. 日本アルプス大観: 立山・黒部・後立山	3,000円	冠松次郎	木星社書院	1931
10. 登高行: 富田碎花詩集(箱なし)	2,000円	富田碎花	更生閣	1938
11. アルプスの氷河 第1部・第2部 (岩波文庫・2冊組・黄ばみ・汚れあり)	1,000円	チンダル(著)矢島祐利(訳)	岩波書店	1948
12. スウィス日記[横山版](箱なし)	5,000円	辻村伊助	横山書店	1922
13. 高山植物の培養(カバーなし)	300円	河野齡藏	朋文堂	1934
14. 山と人と生活(破損修理部分あり)	2,000円	高橋文太郎	金星堂	1943
15. 飛騨山川[改訂版](背文字脱落部分あり)	1,000円	岡村利平(編)	住伊書店	1926
16. 関東の山水[第8版]	1,000円	大町桂月	博文館	1920
17. 松浦武四郎[人物叢書](水濡跡・汚れあり)	500円	吉田武三	吉川弘文館	1967
18. Mountain Craft	2,000円	G.W.Young (ed.)	Methuen	1921
19. On High Hills: Memories of the Alps	2,000円	G.W.Young (ed.)	Methuen	1927
20. The Spirit of the Hills	1,000円	F.S.Smythe	Hodder & Stoughton	1950
21. Early Travellers in the Alps	3,000円	G.R.de Beer	Sidgwick & Jackson	1930
22. My Climbs in the Alps and Caucasus	1,000円	A.F.Mummery	Basil Blackwell	1946

◆重複本の会員頒布(第三回)

図書管理委員会

書リスト参照)

昨年に引続き、図書室内の重複本の

一部を希望者に頒布します。(頒布図書は図書ラベル、蔵書印、廃棄印

創立 90 周年記念 募金のお願い

90周年合同募金委員会

本募金は、会員の皆様と記念事業に賛同する企業に対して呼び掛けを行い、既に1か年を経過いたしました。

お陰様で当初の目標額は達成いたしました。マカルー登山、記念式典、フォーラム、いずれも予想外に費用がかさみ、加えて公的助成金の額も目論見を下回った関係で、未だ多額の赤字が計上されております。

募金の期間は平成8年3月末までを見ておりますので、会員の皆様には度々で恐縮ですが、なおいっそうのご協力をお願い申し上げます。

一九九二年に発行した日本山岳会会員名簿が大分古くなって、変更が多くなってきました。一九九六年版会員名簿を来年二月には発行する予定で準備しておりますので、今しばらくお待ちください。

◆会員名簿発行のお知らせ

総務委員会
一九九二年に発行した日本山岳会会員名簿が大分古くなって、変更が多くなってきました。一九九六年版会員名簿を来年二月には発行する予定で準備しておりますので、今しばらくお待ちください。

(水野)

◆千葉工業大学ナンガ・バルバット登山報告会を開催

ナジール・サビール氏も来日予定
千葉工業大学ナンガ・バルバット登山隊一九九五(隊長坂井広志ら十名)は本年七月二十三日、日本人として初めてナンガ・バルバット(八二二五メートル)の新ルート開拓に成功、隊長

なお、住所、電話番号など変更のある会員はできるだけ早めにお申し出ください。
◆山をテーマの三人展、今年も開催
例年秋に開催している鈴木正俊(木版)、榎本進(油彩)、三宅次郎(油彩)の三人展です。
日時 十一月六日(月)～十一日(土) 十一時～十八時(最終日十六時)
場所 室町ギャラリー
中央区日本橋室町一―二―一
○(松崎ビル)
TEL・〇三―三―四一―八八八八
◆千葉工業大学ナンガ・バルバット登山報告会を開催

坂井広志、隊員矢部幸男、秋山武士の三名が頂上に立ちました。登山報告会、登頂祝賀会を左記のとおり行います。
日時 十一月二日(木) 十八時三十分～
場所 港区六本木・国際文化会館
(地下鉄日比谷線六本木駅下車徒歩五分)

*パキスタンよりカラコルム・ファンデーションの説明を兼ねナジール・サビール氏が来日する予定です。
問合せ 豊島区南池袋二―四七―四(柳池袋松屋内) 坂井広志宛
TEL・〇三―三―九八九―〇五〇二
FAX・〇三―三―九八七―一八一五

ルーム日誌

24日	研究会
23日	名譽会員を囲む会 山の自然学集委員会
22日	総務委員会 財務委員会
21日	九十周年記念事業委員会 アルパインスキークラブ
10日	山げら会
9日	93同期会
7日	総務委員会 九十周年式典委員会
5日	青年部 三水会
1日	アルパインスケッチクラブ
8月	

■会員移動 物故

山下道雄(四〇九七)	7・1・16
鈴木秀雄(九七六二)	7・6・19
中保(四七二六)	7・7・8
畠山次郎(九五〇四)	7・7・9
久保孝一郎(七三七九)	7・7・19
清野恒(七九九五)	7・7・20
武井修三(一〇九四六)	7・8・18
退会	
能勢建夫(五〇六七)	7・7・31
山崎豊(八九〇六)	7・7・31
石森芳太郎(六八九七)	7・7・31
藤原謙二(六四三四)	7・7・31
伊東宏晃(九八八五)	7・7・31
終身会員	
井上博(五九九〇)	

28日 アルパインスキークラブ
30日 評議員会
8月来室者403名

日本山岳会報 山 605号

1995年(平成7年)10月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
振替口座 東京3-4829
発行者 村木潤次郎
編集人 伊藤 敬
印刷 株式会社 双陽社